

博物館ノート――

八葉寺奉納小型納骨塔婆

この木製五輪塔は、河沼郡河東町大字広野の八葉寺に奉納されていたものです。八葉寺は、寺伝によれば空也上人の開基とされています。『新編会津風土記』などによれば、古くは九品念佛の一派であったといいます。天正のころにはすでに会津若松市に現存する真言宗金剛寺の末寺（永兼寺所）になっていたことがわかります。

八葉寺の一帯は、会津高野山と呼ばれる会

津地方第一の靈場となっています。

もとは七月一日から十一日まで、現在は八月一日から七日までこの寺の

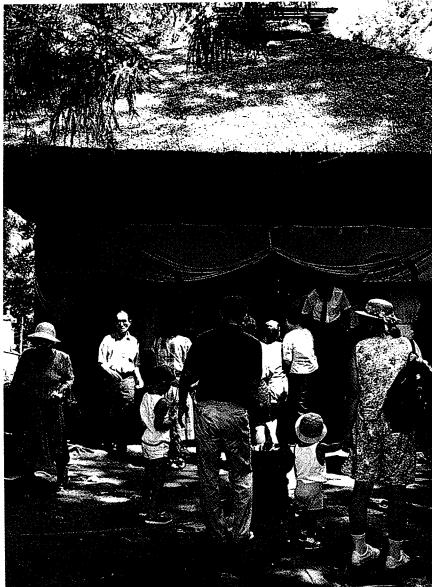
阿弥陀堂の祭りが行われます。この期間には、冬木沢まいりとか高野山まいりなどといつて多くの参詣者が集まつて来ます

が、特に五日は空也念佛踊りが行われるのであります。この期間に、家族に死者があつて三十五日以上過ぎている人は、供養の為

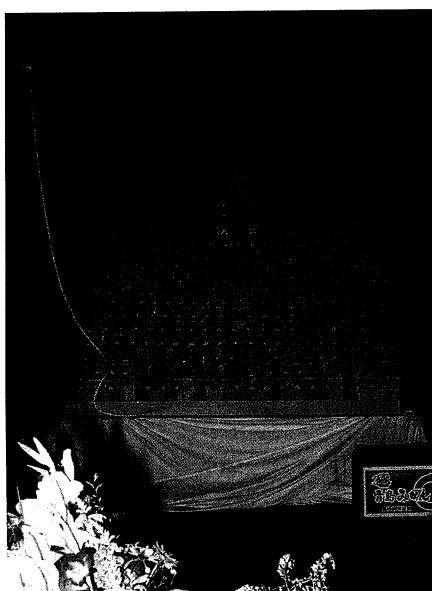


木製五輪塔

大きさは7から23センチメートルとまちまちで、平均は15センチメートル。江戸時代末までは奉納者の手作りが多く、形に違いもある。



祭りの日の奥の院



祭りに奉納された木製五輪塔

在のように奥の院に奉納するようになつたといわれています。

八葉寺に現存する五輪塔でいちばん古い記銘をもつのは文禄五年（一五九六）のものであり、奉納者は会津若松市を始め、河沼郡、大沼郡、耶麻郡に広がり、一部南会津郡からの奉納もみられます。（国指定重要有形民俗文化財）